



- **ORACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY**
- ●MEDITERRANEAN SUNDANCE●ELEGANT GYPSY SUITE
- ●LAND OF THE MIDNIGHT SUN●ELECTRIC RENDEZVOUS
- ●PASSION, GRACE AND FIRE SPLENDIDO SUNDANCE
- ●RHAPSODY OF FIRE

CONTENTS

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY レース・ウィズ・デヴィル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ from the album "ELEGANT GYPSY"	3
MEDITERRANEAN SUNDANCE 地中海の舞踏ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	— I 2
ELEGANT GYPSY SUITE エレガント・ジプシー制画 from the album "ELEGANT GYPSY"	25
LAND OF THE MIDNIGHT SUN 「他の大地 from the album "LAND OF THE MIDNIGHT SUN"	37
ELECTRIC RENDEZVOUS エレクトリック・ランデヴー from the album "ELECTRIC RENDEZVOUS"	 47
PASSION, GRACE AND FIRE パッション、グレース・アンド・ファイアーfrom the album "ELECTRIC RENDEZVOUS"	57
SPLENDIDO SUNDANCE スプレンディド・サンダンス from the album "SPLENDIDO SUNDANCE"	70
RHAPSODY OF FIRE 炎のラブソディー from the album "TIRAMI SU/AL DIMEOLA PROJECT"	82

Front & Inner Photos by Nathaniel Welch

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY

レース・ウィズ・デヴィル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ Music by Al DiMeola

ディメオラが「速弾きギタリスト」として知られるようになったのは、'70年代後半のことである。現在のディメオラに対してそう渾名するのはあまりふさわしいことではないし、第一速弾きなどという言葉もこの頃耳にしないのだが、この「レース・ウィズ・・・」は「ディメオラの速弾き」を世に知らしめた曲のひとつであったことに間違いない。大体においてこの曲の場合、彼の「速弾き」をいかにブッシュするか、という部分に相当力点がおかれているのはあきらかで、イントロなどプレークしてのユニゾンのリフなどオーバーダブ

るだけでなく実際速いし、かなり正確な運指とピッキングを要するのはもはや言うまでもない。ハンマリング、プリング等は一切使用されていない。国は、どういう意図でこういうパターンをここに持ってきたのか不可解な気もするが、この頃のディメオラの曲にありがちな傾向といえる。このあたりのアレンジはスパニッシュというよりはチック・コリアの影響が大である。©からまたスピード関係に復帰。この3連もイントロと同様。そのつなぎでアドリブの回。非常にダイアトニック的なソロで、ジャズっぽい感じとか解決感と

CONTENTS

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY レース・ウィズ・デヴィル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ from the album "ELEGANT GYPSY"	3
MEDITERRANEAN SUNDANCE 地中海の舞踏ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	— I 2
ELEGANT GYPSY SUITE エレガント・ジプシー制画 from the album "ELEGANT GYPSY"	25
LAND OF THE MIDNIGHT SUN 「他の大地 from the album "LAND OF THE MIDNIGHT SUN"	37
ELECTRIC RENDEZVOUS エレクトリック・ランデヴー from the album "ELECTRIC RENDEZVOUS"	 47
PASSION, GRACE AND FIRE パッション、グレース・アンド・ファイアーfrom the album "ELECTRIC RENDEZVOUS"	57
SPLENDIDO SUNDANCE スプレンディド・サンダンス from the album "SPLENDIDO SUNDANCE"	70
RHAPSODY OF FIRE 炎のラブソディー from the album "TIRAMI SU/AL DIMEOLA PROJECT"	82

Front & Inner Photos by Nathaniel Welch

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY

レース・ウィズ・デヴィル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ Music by Al DiMeola

ディメオラが「速弾きギタリスト」として知られるようになったのは、'70年代後半のことである。現在のディメオラに対してそう渾名するのはあまりふさわしいことではないし、第一速弾きなどという言葉もこの頃耳にしないのだが、この「レース・ウィズ・・・」は「ディメオラの速弾き」を世に知らしめた曲のひとつであったことに間違いない。大体においてこの曲の場合、彼の「速弾き」をいかにブッシュするか、という部分に相当力点がおかれているのはあきらかで、イントロなどプレークしてのユニゾンのリフなどオーバーダブ

るだけでなく実際速いし、かなり正確な運指とピッキングを要するのはもはや言うまでもない。ハンマリング、プリング等は一切使用されていない。国は、どういう意図でこういうパターンをここに持ってきたのか不可解な気もするが、この頃のディメオラの曲にありがちな傾向といえる。このあたりのアレンジはスパニッシュというよりはチック・コリアの影響が大である。©からまたスピード関係に復帰。この3連もイントロと同様。そのつなぎでアドリブの回。非常にダイアトニック的なソロで、ジャズっぽい感じとか解決感と

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY

レース・ウィズ・デヴィル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ Music by Al DiMeola

ディメオラが「速弾きギタリスト」として知られるようになったのは、'70年代後半のことである。現在のディメオラに対してそう渾名するのはあまりふさわしいことではないし、第一速弾きなどという言葉もこの頃耳にしないのだが、この「レース・ウィズ・・・」は「ディメオラの速弾き」を世に知らしめた曲のひとつであったことに間違いない。大体においてこの曲の場合、彼の「速弾き」をいかにプッシュするか、という部分に相当力点がおかれているのはあきらかで、イントロなどブレークしてのユニゾンのリフなどオーバーダブも効果的に使われており、それ相応のインパクトがある。そのイントロ、ベースとユニゾンの低音部のリフを3連で表記した。符点8分+16分で書こうとしたが、ちょっと訛った感じと途中で入るコンガの8-6のパターンを意識したのである。まあこの辺は各自のフィーリングに任せたいところ。そしてこれがこの曲の最大のトピックであり、最大の難関でもある16分音符のユニゾンは、スピード感があ



























MEDITERRANEAN SUNDANCE

地中海の舞踏

Music by Al DiMeola

ベジオはEm。との見方が一般的かも。 「A、テーマにあたると思うこの部分のポイントは、やはり後半の16分だろう。これが決まらないと冴えないに違いない。 Bからおもむろにディメオラのアドリブ。32小節間は Bmと Amのチェンジ(勿論 Gmajのダイアトニック)、 ©からテーマ「A」と同様の進行を取る。フレージングのしかたはご覧のとおり、Gのダイアトニックが殆ど。(Brのときひ音は3度のコード・トーンである。) Crは本来のCmajrの代理だが、あまり意識する必要はないと思う。 パコのアドリブは 回から。ここでのディメトラのバッキングは大体において基本的なフォームなので、おおかた省略した。 国で掛け合い形式になって、 「Eの大盛り上がりストローク(表記は省略)へ。ところで、特にパコのタブ表記など確定し難いものが多分にありましたので、その点ご自身でご検討いただけたら幸いです。



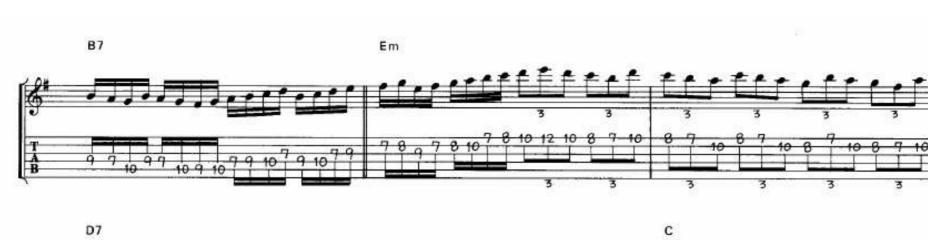






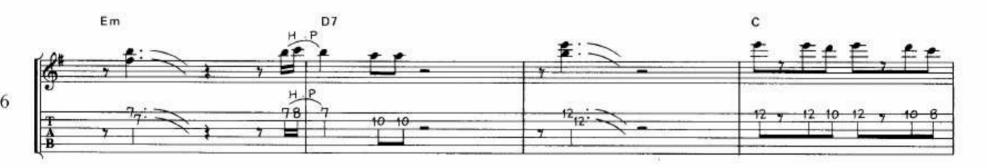




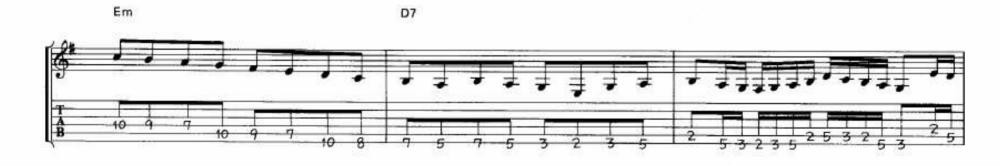






























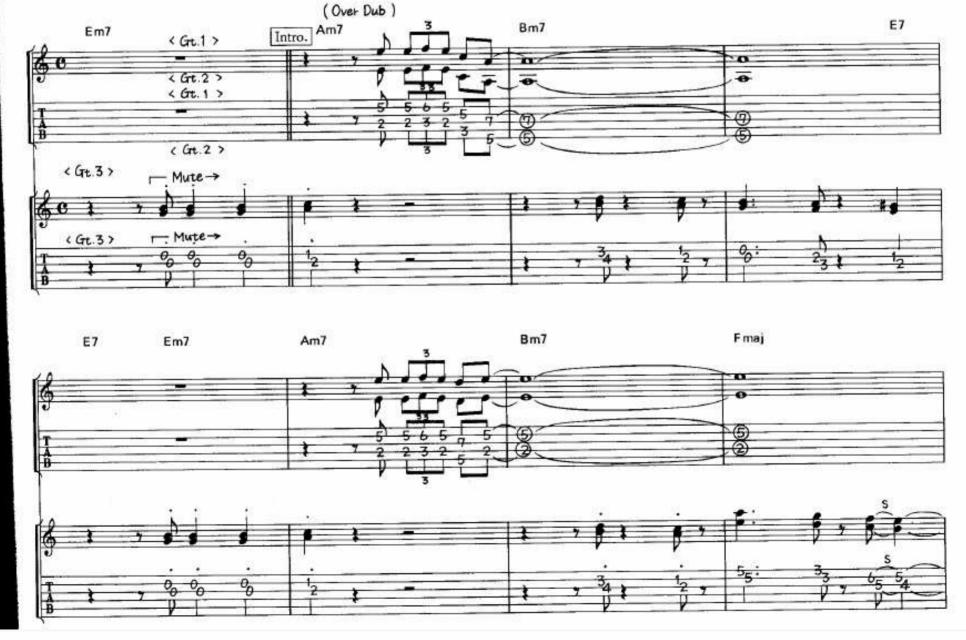


ELEGANT GYPSY SUITE

■ エレガント・ジプシー組曲 • Music by Al DiMeola

E

ジャーとかフェイザーとか、その辺のエフェクトが深く掛かっていて独特なサウンドである。 「に突入する速いパッセージは全体に、もうちょい詰まった感じ。 「Gはシンセのアドリブ。ヴォイシングだけ記譜したので、各自思い思いのリズムで。 日はひとくくりにしたが、実は細分化可能。どうでもいいけど、ホント凄いパターン数。だいぶ作曲にも時間を費やしたことだろう。 「日は、イントロ〜」「国の再現及びエンディングである。これ以外の曲についても言えることだが、ディメオラとしてみれば曲を単に「テクニックの入れ物」にしないよう作曲に力を入れた分、凝りに凝って構成の複雑化を招いてしまったふしがあるようだ。彼の財産である強力なテクニックをそのまま必然的に行使するための方法論を、必死に模索していたのではないだろうか。



Bm7

Am7

E7

25



























LAND OF THE MIDNIGHT SUN

Music by Al DiMeola

ディメオラの初リーダー作、邦題「白夜の大地」の表題曲。当時 ブームとまで言われたフュージョンの香りが強い作風なのは多分そ の火つけ役チック・コリアの影響である。しかしBGM的な軽いフュ ージョンとは違い、分厚いギター・サウンドでメカニカルに弾きま くるこの気骨。これがディメオラの魅力だったのは言うまでもない。 この本の読者であれば当然ご承知のことと思うが、世間では「速き ゃいいってもんじゃない」と揶揄する心無い人々がおり、当時そこ らじゅうで喧々囂々の論議が行われていたものである。確かに、「速 きゃいいってもんじゃない」のはうなずけるが、その単純事実を誹 傍中傷の材料にするのはけしからんと思う。好きか嫌いかは別とし て、あまり人のやっていることをガタガタいうのはよろしくない。 つい横道にそれてしまった、そろそろ本題に。曲の構成単位はおお まかに、A、B、C、D、E、Fの6パートとこれも多い(ディメオラにしては少ない)が、Aの伏線が割と全体に行き亙っているのでそんなに違和感はない。A~Cまでがテーマ・リフ、Dはシンセと掛け合いでアドリブ。本格的に弾きまくりになるのはF中盤からだ。譜面の印刷密度をみれば一目瞭然な連符の応酬のところ(テンポ倍で書けばよかったと一瞬後悔した)で7連なんかが入り乱れているが、こうでもしないと3拍20連符とか妙な書き方をせねばならず、他にこれといって妙案も浮かばなかったための表記とご理解いただきたい。基本的にはほぼ均等な長さの音符が全体的に伸び縮みしているに過ぎないので、そのつもりで(コピー譜では常識だが、念のため)。印刷密度もさることながら、このフレーズの音圧も圧倒的。これはやっぱり彼の「財産」なのである。





















ELECTRIC RENDEZVOUS

■ エレクトリック・ランデヴー Music by Al DiMeola

ロック的なリフとラテンのSON系リズムをうまくブレンドし、高速フレーズを特に前提にしていないという点においても、ディメオラのその時なりのらしさを表現した作品と言えよう。曲中のパターン・チェンジが多く、組曲的なものもまた然り。個人的にはどうもこのイントロのアルペジオのパターンなんかの脈絡がいま一つ釈然としないのだが。ま、そのあたり一応「序章」という位置付けで、個から本題ということで解説を進めよう。固と同は同様のコード・チェンジを違ったアプローチで見せているところだが、同の方は2拍3連から参フィールに持ち込んでいる。演奏する場合、この譜面通りでテンポ的には大丈夫だが、頭がハチロク(8分の6のこと)に切り替わってないと単なる2拍3連である。勿論ドラムのパターンに負うところが大きいが、ドラマーだけの責任にしてはいけない。とりあえずこのあたり、キメごとが細かいが細かいなりにおいしい

F#m7

ところ。それから一旦フツーの4拍子に戻って、回、またここでパターンが変わり、これがブリッジになって国のSONパターンにいく(ホントにパターンが多い)これもベース・ラインとドラムのパターンが特徴的で、いまではジャズなんかで盛んに取り入れられているリズム・パターンだ。ハマると結構気持ちいいのでトライしてみては如何でしょう。同は同様のチェンジで今度はロック的なリフ。この辺が一番おいしいところでしょう。アドリブはこのパートでシンセとの掛け合いという形。3連4拍フレーズ(多分得意わざのひとつ)とかかなりかっこいいと思う。回のフィルもブレークをはさんで、超個性的と思える田へ。むか~し流行った'NAC'というバンドのパターンにも似てる気もするが、面白いコンセプトだ。これもスティーブ・ガッドが強力に光っている。



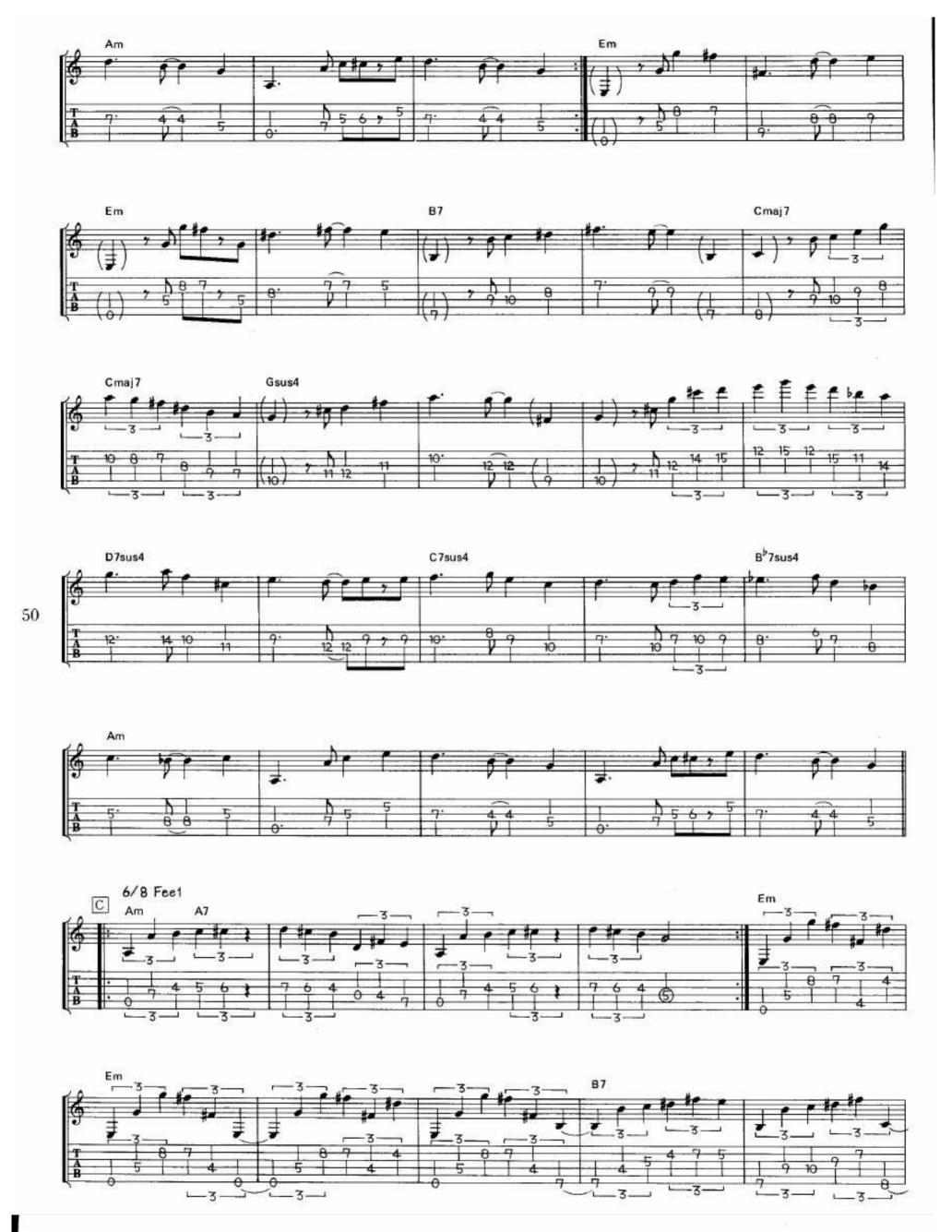
B_m7

E7











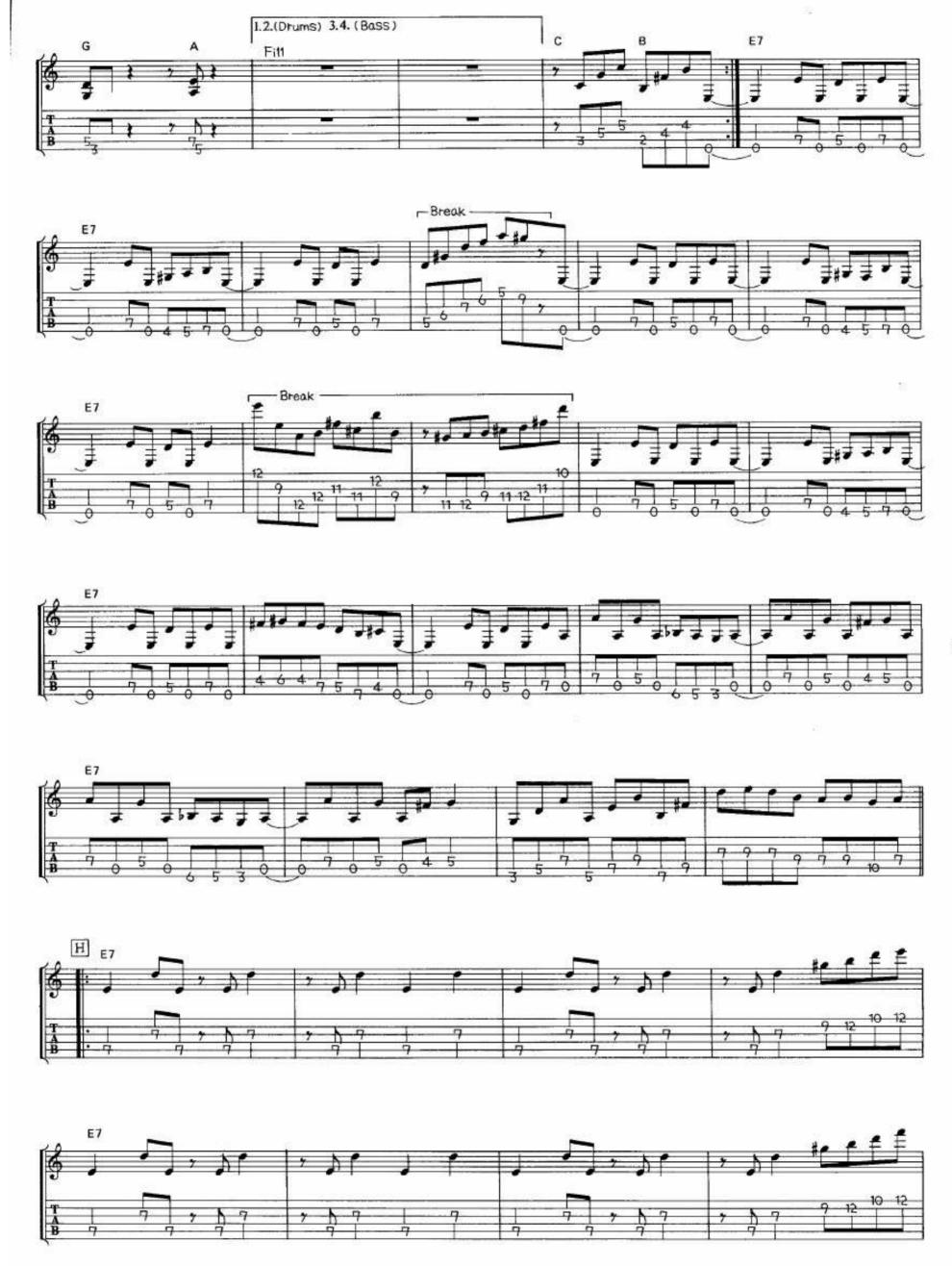














PASSION, GRACE AND FIRE

ペッション、グレース・アンド・ファイン Music by Al DiMeola

て、歌い方を重視したビートの取り方を工夫して演奏してもらいたい。全体をこの譜面を用いて初見演奏する必要に迫られている方は別として。その参考になるかどうか不安ではあるが、この冒頭の部分のみアクセントをふってみた。例えば、の話だが、このアクセントの位置と拍を考えて頭を動かしてみるとか、足踏みをしてみるなど試みる価値はあるかもしれない。中南米の音楽だけでなく、世界の多くの音楽は、必ずしも一定のビートを感じて演奏するのではなく、それぞれ独自のビート・クリックを以ってグルーヴするのである。但し、特にソロの部分など、そういった細かいビートでなく「小節をまるごと「拍で感じるような所もかなりあるので、臨機応変に対処して欲しい。

































SPLENDIDO SUNDANCE

■ スプレンディド・サンダンス・ Music by Al DiMeola

タイトルと途中のアルペジオ・モチーフからして、「地中海・・・」の 続編との推測がなされるが、これはディメオラー人のオーヴァーダ ブによるデュオ演奏である。さてその譜面の割り付けだが、私のオ ーディオ・システムによることを前提に、左チャンネルが譜面上段 (以下Lch)、右チャンネルが譜面下段(以下Rch)である。イントロ は後は国パートのルパート演奏で、主体はRch。Lchはバッキングと オブリだが、アルペジオ・パターンの詳細は全音符にて省略致しま した、悪しからず。人は「地中海・・・」的アルペジオ・モチーフ。地 中海〜に比べ、一部裏返る感じのパターンなどリズム的には多少疑 っているが、コード的にテンション感に欠ける。人は基本的にはこ のパターンに乗せてのテーマ・リフ演奏。途中34拍子が入っている が、厳密には18拍子位だった。実際は本来44拍子のものが、単に短

めになっただけかもしれない。国はイントロとおなじリフのイン・テンポ演奏(これがサビだね)。 [Cは同のフェイク的アドリブで、バッキングの方は同とほぼ同様につき省略。「M」は右手ミュート(右手の側面でブリッジ・ミュートしながら弾く)の意味で、「・」(スタッカート)の音がミュートをかける音。 [D)から新しくチェンジになってアドリブである。 [D) 43小節目あたりからテンポが速くなっていくが、このあたりが真骨頂といえ、強力に速いバッセージが相次ぐ。一応5連とか書いてあるけど、はっきりどこからが5連とかそういう問題でもないのであまり目くじらをたてないように。それとこの辺のバッキングのことだが、基本的なコード・フォームがほとんどで、コード・シンボルの表記で充分かと思えたので省略した。































RHAPSODY OF FIRE

Music by Al DiMeola

「ニュー・ディメオラ」とでも言うべき彼の新しい音楽性とその意欲を表わした、アコースティック・ギターとパーカッションによるナンバー。開放弦を利用したオープン、クローズ双方のヴォイシングによるアルペジオが聴かせどころのひとつ。イントロ、区などパターンナイズされたアルペジオ部分がそれだが、ギター・アルペジオ奏法の美しさを見事に表現していることがおわかりいただけると思う。ギターにおけるコード・ヴォイシングの方法には、このように表現形態としての可能性が思ったよりもあるものなのである。さて、部分的解説だが、まずイントロ、引拍子表記にしたのはご覧の様に3拍のパターンだからで、それ以外に深い意味はない。C*mァもAmajァも I、2弦の開放をコード・トーンに割り当てる(C*mァの3度のE、Amajァの5度とEと、9thのB)ことで、クローズ・ヴォイシングを実現している(押さえ方が難しいのは目をつぶった方がい

い)。InterludeはテーマAにとっては事実上のイントロにあたるもの。これの面白いのは途中まで3度(メジャーならび、マイナーならる)がなく、その前が関係調Cをmなために、6小節目になって「ゲ。マイナーじゃん。」と思わせるところ。そのノリで、A、テーマ演奏、B、ちょっとしたアドリブ。この固あたりにしても以前のディメオラとはだいぶイメージが違い、フレージングなどジャズっぱい。で、先に触れたではアルベジオの聴かせどころである。そのあとのAで、回に繋ぐブレークがあるが、このコード、4弦だけを全部半音ずつ上げたほうがらしいかもしれないのでお試しあれ。そのブリッジを利用して、DでCmに転調。アドリブしてフィニッシュへ向かう。非常に進行感、コード感のあるいいソロだと思った。エンディング、遂に出た!という部分のB音は基本的にはミス・タッチ。また、実際には全体がもう少しレイド・バックしている。

